

# 女が「言葉」を話すとき

—— ブレイクの『アルビオンの娘たちの幻想』 ——

---

川 津 雅 江

---

## I

*Visions of the Daughters of Albion* (1793) は従来 “Feminism” の書であるとみなされてきた。<sup>(1)</sup>確かに女主人公の Oothoon は既成の制度や思想の錯誤を暴き、あらゆる束縛からの解放を願う。彼女の声は沈黙を強いられてきた「他者」(家父長制社会における女性、支配者に対する被支配者)からの声である。革命は被抑圧者が反抗の声を抑圧者に向けたとき起こる。その意味でウースーンは女性解放を目論んだといえる。だが、詩の大半を占める彼女の独白には、「女の言葉」と「女の存在」との間に断絶がみられる。彼女が「他者」の声たる「女の言葉」を発するとき、「女」としては存在していない。彼女は自らの「女の言葉」に拘束され、「女の存在」から引き裂かれているのである。

ウースーンを巻き込んだ悲劇的三角関係は現実の両性の葛藤をえがいているかにみえる。しかし、われわれがウースーンの独白に自家撞着した「女の言葉」と「女の存在」を読むとき、ウースーンのみならず三角関係自体もきわめて虚構性を帯びる。これこそ同詩がアルビオンの娘たちの「幻想」の枠組みをとりながら、何故彼女たちがウースーンの声だけをこだまのように返すのかを解くひとつの鍵を与えるであろう。本論は「女の言葉」と「女の存在」の相互矛盾に着目して、『アルビオンの娘たちの幻想』を読む試みである。

## II

はじめに「他者」の反抗的な声たる「女の言葉」について説明を加えたい。Blake がつねに修正して受容してきた Milton の *Paradise Lost* では、知恵の木は蛇に “reason” と “speech” の両方を解放した (IX, 600)。(2) 「言葉」の解放を約束する蛇の誘惑は Eve を墮落へと導いたが、女性にとってもっとも望ましいものであったろう。墮落以前のイヴには自分の「言葉」がなかった。彼女は Adam にいっている：“My author and disposer, what thou bidd’st / Unargued I obey; so God ordains, / God is thy law, thou mine” (IV, 635-37)。彼女は神—アダムの「男の言葉」に従属していた。それゆえユダヤ・キリスト教を基盤にした家父長制社会では、女が「言葉」を話すことは社会的文化的に墮落であるとみなされ、抑圧されてきた。(3) 「言葉」を話す女は、「女は男のためにつくられた」という聖書の説明を根底から脅かすものであったのである。

「言葉」を話す女はまた性的に墮落した女と結び付く。(4) 男は常に命令、禁止、否定の「言葉」で女を道徳的に規制した。“The Cult of Chastity” は家父長制を意味づける「男の言葉」の所産だった。十八世紀の小説には未婚女性の密通、凌辱、妻の姦通が数多くみられるが、いずれも「男の言葉」に対して目に見えぬ脅威をあたえるがゆえに女たちはなんらかの罰をうけた。女の性的墮落は「男の言葉」に対する大胆な反抗だったからだ。

ブレイクの *Songs of Experience* (1789-94) 中の “A Little Girl Lost” は、「男の言葉」を前にして沈黙せざるを得ない女を描く。Ona が恋人と日中のおおらかな愛をたのしんだあと家路につくと、彼女の父親がつぎのようにいう。

Ona! pale and weak!

To thy father speak:

O the trembling fear!

O the dismal care!

That shakes the blossoms of my hoary hair (E30)<sup>(5)</sup>

父親は娘の性的墮落を嘆き、性愛に関する禁止を暗黙に示している。しかし、それに答えるオーナの声はない。彼女は父親の規範に縛られているので、性的墮落の刻印を否定さえしない。彼女は沈黙を強いられた女である。

禁止の声は女だけでなく、ときに男にも向けられる。“The Garden of Love” (SE) の “I” は「愛の園」へいくが、そこには扉に “Thou shalt not” と書かれた “Chapel” が建っていた。祖型的な「愛の園」は地上樂園であると同時に女の体を示す。しかし「礼拝堂」(女性性器)は閉ざされていたばかりか、「わたし」は「汝～するなかれ」というモウゼ的律法により中に入ることを禁じられる。「わたし」は欲望を押さえねばならない。欲望の抑圧の源は外的な律法(を定めたものたち)であるが、「わたし」はそれに束縛され、逆らわない：“Priests in black gowns, were walking their rounds, / And binding with briars, my joys & desires” (E26)。彼もオーナとおなじく沈黙したままである。

これらに反して、『アルビオンの娘たちの幻想』のウースーンは「言葉」を話す女である。彼女は Theotormon を愛しているが、Bromion に凌辱される。プロミオンは彼女を “harlot” と呼び、身籠もった彼女をセオトーマンと結婚させようとする。だがセオトーマンは “the adulterate pair” を背中合わせに縛り、汚れてしまったウースーンを受け入れず、悲しみに泣く。セオトーマンとプロミオンはともに旧約的絶対神と否定の掟、合理的思考、理性の体现者 Urizen の支配下にいる。しかしウースーンはそうではない。オーナと異なり、ウースーンは真の純潔とは何であるかを説き、自分に押された娼婦の刻印を否定する。彼女は性的墮落を再定義し、「男の言葉」に挑戦するのである。

男性優位社会では女は男の「他者」である。男は女を交換の対象、所有物とみなしているため、財産価値を高めるために結婚前の女に “virginity” を、財産保持のために結婚後の女に “chastity” を要求する。「貞潔崇拜」はまた娼婦を必要悪にした。男は欲望の吐き口を娼婦に求める。ブレイクの同時代には、一般に結婚年齢が高くなったこともあり、大都市に娼婦の需要が急激に増した。<sup>(6)</sup>農村の貧しい女たちが職を得ようとしてもお針子か召使以外は娼婦になるしか道のない時代である。そこでこぞってロンドンに流れ込み娼婦になった。

娼婦は社会的・経済的問題の申し子だったのである。

要するに男は女を欲望の対象として妻か娼婦の二種類に腑分けする。男たちはそれぞれ一人の女を独占するか、一人の女を共有するかする。セオトーモンは自分一人の女を、プロミオンは共有の女を求める。妻を求めるセオトーモンは、だからプロミオンに犯されたウースーンを許すことができない。このように二元論的合理思考は、一つしか答えの無い真実を求める。プロミオンは言っている。

Ah ! are there other wars, beside the wars of sword and fire !  
 And are there other sorrows, beside the sorrows of poverty !  
 And are there other joys, beside the joys of riches and ease ?  
 And is there not one law for both the lion and the ox ?  
 And is there not eternal fire, and eternal chains ?  
 To bind the phantoms of existence from eternal life ? (VDA, 4 :19-24)

「一つの掟」はユリゼンの秩序体系を特徴付ける。それは差異を無視して価値判断をおこなう絶対的な規範である。*The Book of Urizen* (1794) で記されるように、ユリゼンが定めた掟は唯一絶対神を頂点に、男性中心の社会構造内ではたらき、悦びも欲望も一つしかない：“One command, one joy, one desire, /One curse, one weight, one measure / One King, one God, one Law” (BU, 4 :38-40)。

「一つの掟」はあらゆる差異を抑圧するのである：“One Law for the Lion & Ox is Oppression” (MHH, E44)。

ウースーンは「一つの掟」の錯誤の原因に気付いている。

O Urizen! Creator of men! mistaken Demon of heaven:  
 Thy joys are tears! Thy labour vain, to form men to thine image.  
 How can one joy absorb another? are not different joys  
 Holy, eternal, infinite! and each joy is a Love. (VDA, 5 : 3 - 6)

ユリゼンは男だけ (“Man”ではなく“men”であることに注目したい)を自分に似せて創造した。彼は創造の場において女を除外した。おそらく、『失楽園』のイヴの創造が“human race”(IV, 475)を生み出す目的でなされたように、女は男によって未来の世代が刻まれるだけの「空白」とみなされたからだろう。<sup>(7)</sup>このとき女のセクシュアリティには生殖機能しか認められていない。だからユリゼンの法の執行者プロミオンは、ウースーンに自分の“signet”を刻印して彼女を占有するばかりか、妊娠させる。彼にとって、女のセクシュアリティは必ず生殖に結び付いていたのである。だがウースーンは男と女の性的な悦びは違うと指摘する。なるほど男の性的な悦びは必ず生殖行為の授精を伴う。しかし女の性的な悦びをも生殖に結び付けることは、男とは違う女の悦びを「消し」(“absorb”)、抑圧することである。これは、Spivakの言葉を借りれば、“symbolic clitoridectomy”あるいは“the effacement of the clitoris”に他ならぬ。<sup>(8)</sup>男とは違って女はクリトリスを核にして全身で性の悦びにひたり、排卵、妊娠、出産の生殖の枠を逃れている。このような女の性の悦びをウースーンは「神聖で永遠で無限」というのである。そして悦びこそ「愛」なのだ。

ウースーンの主張は、のちにブレイクが墮落世界を“World of Generation”と命名したことと無縁ではあるまい。「発生界」とは生と死がたゆまなく反復する世界である。人間は永遠界から墮落して男女両性に分かれた。その後の男と女は生殖のためだけに結び付き、種の保存をはかる。しかし生殖を目的にした男女の結合は「愛」とは呼べない。“Generating Love”は“a pretence of love to destroy love”(J, 17:26)である。

ウースーンは女固有の性の悦びの抑圧が女に「仮面」(“a pretence”)をつけたことを知っている。社会、政治、宗教などの男の体制に縛られた女は嫌な男と結ばれて、昼は肩に鞭を受け、夜は“the wheel of false desire”(VDA, 5:27)をまわし、出産を余儀なくさせられる。あるいは、処女性を武器にしそれを売り物にする。<sup>(9)</sup>

Then com'st thou forth a modest virgin knowing to dissemble  
With nets found under thy night pillow, to catch virgin joy,

And brand it with the name of whore; & sell it in the night,  
 In silence. ev'n without a whisper, and in seeming sleep:  
 (VDA, 6 :10-13)

「慎み深い処女」は床のなかで悦びの声もあげず、「眠ったふり」をする。ウースーンはこれを“hypocrite modesty” (VDA, 6 :16) と呼ぶ。彼女は、悦びの声をあげることが娼婦ならば、“Then is Oothoon a whore indeed!” (VDA, 6 :18) とまでもいうのである。

ウースーンもはじめは「慎み深い処女」だった。詩の冒頭で、彼女は自分を慰める花をさがして、“the vales of Leutha” をさまよう。しかし“Marygold” を摘むのをためらう。花摘みは伝統的に性愛の達成を意味した。ウースーンは処女喪失に一抹の不安をもつ。彼女は「貞潔崇拜」に囚われていた。彼女は、のちにその原因を明らかにしている。

They told me that the night & day were all that I could see;  
 They told me that I have five senses to inclose me up,  
 And they inclos'd my infinite brain into a narrow circle.  
 And sunk my heart into the Abyss, a red round globe hot burning  
 Till all from life I was obliterated and erased. (VDA, 2 :30-34)

女に処女性や貞節を要求する社会や宗教の制度という外的な束縛は、人間の知覚が五官に限られているという内的束縛と因果関係にある。ブレイクは人間はもともと五官を超えた無限の感覚 (“enlarged & numerous senses,” MHH, E38) をもっていたが、墮落により限られたと考えた：“man has closed himself up, till he sees all things thro' narrow chinks of his cavern” (MHH, E39)。五官の束縛は自己の束縛なのである。このように、花摘みをする前のウースーンは外からも内からも縛られていた。ついに彼女は「いのちから消され、跡かたもなくなった。」彼女は、文字どおり、生殖機能だけに存在価値がある「空白」だった。

マリゴールドは、ウースーンを偽りの「慎み深い処女」から目覚めさせるために、花摘みの真の意味をあきらかにする。

The Golden nymph replied; pluck thou my flower Oothoon the mild  
Another flower shall spring, because the soul of sweet delight  
Can never pass away. she ceas'd & closd her golden shrine.

(VDA, 1 : 8-10)

花摘みは処女喪失という一回限りの否定的なものではない。処女性にこだわることは女のセクシュアリティを妊娠、出産に結び付く生殖行為だと考えているからだ。だが、花摘みとは生殖とは無縁の、「決して終わらない」悦びへ導く肯定的な第一歩である。処女喪失は、終点ではなく、始点である。

花摘みをする前のウースーンは女のセクシュアリティを知ることを無意識に拒んでいる。何故なら、ウースーンが花摘みをためらったのはマリゴールドが“a nymph”でもあったからだ：“Art thou a flower! art thou a nymph! I see thee now a flower; / Now a nymph! I dare not pluck thee from thy dewy bed!” (VDA, 1 : 6-7)。Hilton に拠れば、“Nympha”はクリトリスを示す古典的な通俗語だった。<sup>(10)</sup>ウースーンはクリトリスの悦びをまだ知らない。しかしマリゴールドの教えにしたがって、花を摘む。その後で、彼女はプロミオンに犯されるが、すでに男とは違う女のセクシュアリティの意味を知っていたので、処女喪失を嘆かない。彼女はプロミオンを直接非難せず、むしろ処女性にこだわるセオトモンが彼女を受け入れないことを嘆く。彼女はセオトモンにむかい、“Arise my Theotormon I am pure. / Because the night is gone that clos'd me in its deadly black.” (VDA, 2 : 28-29) という。いまやウースーンはあらゆる束縛から解放されている。彼女にとって、真の純潔とは肉体的な処女性を示すのではなく、あらゆる束縛から解放され、無限の感覚の悦びに開かれた自由な精神を持つことである。ウースーンは、自らいうように、“a virgin fill'd with virgin fancies / Open to joy and to delight” (VDA, 6 : 21-22) なのである。

## Ⅲ

ウースーンは家父長制社会の「男の言葉」に反抗した「女の言葉」を提示し、「空白」としての女の存在から解放された。彼女の声は革命をひきおこす「他者」からの声としてまことに力強い。しかしながら、われわれは『アルピオンの娘たちの幻想』が女性解放のうたであるとは性急に断定できない。何故なら、ウースーンの「女の言葉」は女性解放を直接目指しているというよりも、もっぱらセオトーモンの意識の変革に向けられているからである。仮に同書が女性解放のうたとしても、それは第二次的段階である。はじめに男の解放があり、そのつぎに女が解放されるのである。

ウースーンの独白のなかには、「女の言葉」と齟齬をきたした表現が散見する。これらの表現は、「女の言葉」が女に向けられていないことを明白に物語っている。たとえば、ウースーンは「わたしは純潔です」と叫び、セオトーモンに革命の夜明けを告げている。彼女は五官の束縛から解放された。しかしその直後に彼女はまだ夜明けが訪れていないと説いている。

Instead of morn arises a bright shadow, like an eye  
 In the eastern cloud: instead of night a sickly charnel house;  
 That Theotormon hears me not! to him the night and morn  
 Are both alike: a night of sighs, a morning of fresh tears;

(VDA, 2 :35-38)

セオトーモンがウースーンの「女の言葉」を聞き入れないかぎり、夜明けは来ない。ウースーンは自ら述べるように“a solitary shadow wailing on the margin of non-entity” (VDA, 7:15) である。

ネオ・プラトニストと同じくブレイクにとって、「非存在」は神的一者から多の世界へ極限まで墮落した、絶対的物質性を象徴した。<sup>(11)</sup>Plotinus に拠れば、それは「無」ではないが「存在」とは区別されるものであり、通常「無形」あ



るいは「不明瞭」を意味した。つまり、ウースーンは「女の言葉」を発して「空白」としての女の存在から解放されたかにみえるが、実はセオトーモンが意識の変革を起こさないかぎり、明確な存在から遠ざけられている。そしてセオトーモンが彼女に眼を向けて、彼女の存在を認めるならば、彼女は沈黙するはずなのだ。

Silent I hover all the night, and all day could be silent.

If Theotormon once would turn his loved eyes upon me;

How can I be defild when I reflect thy image pure? (VDA, 3:14-16)

ウースーンの「女の存在」と「女の言葉」は二律背反の関係である。彼女が「存在」を得たら、「言葉」を失う。「言葉」を得たら、「存在」を失う。「女の言葉」を話す女は女としては沈黙しているのである。

上記のウースーンの独白のなかに、もう一つの自己矛盾がある。ウースーンは前に「わたしは純潔です」といったが、彼女が本当に純潔であるか否かはセオトーモン次第なのである——「あなたの清い姿を映すとき、どうしてわたしが汚れていましょうか。」セオトーモンが汚れていなければ、ウースーンも汚れていない。ウースーンはセオトーモンという男（の意識）を映しだす鏡である。そしてこの鏡は水鏡である。

Theotormon severly smiles. her soul reflects the smile;

As the clear spring mudded with feet of beasts grows pure & smiles.

(VDA, 2:18-19)

ガラスの鏡は割れたら元に戻らない。それ故鏡は伝統的に処女性と結び付いていた。しかしウースーンの鏡は水鏡である。いったんは泥で汚れても、すぐに澄む。だがいくら鏡が透明でも、鏡の前にたつものが汚れていたら、鏡はそれを映さざるを得ない。ウースーンの水鏡は処女性が女の側の意識ではなく、男の側の意識次第であることを示している。男の意識の変革なくして、女は解放

されないと考えているからなのか——実際ウースーンは終始自分が属する性の解放ではなく、セオトーモンの解放だけに心をくだく。

I cry arise O Theotormon. . . (VDA, 2 : 23)

Arise my Theotormon I am pure. (VDA, 2 : 28)

Arise you [Theotormon] little glancing wings, and sing your infant joy !

Arise and drink your bliss, for every thing that lives is holy !

(VDA, 8 : 9 -10)

ウースーンにとって、プロミオンと同じくユリゼンの支配下にいるセオトーモンは、自分とは別の意味でユリゼンの被抑圧者である。セオトーモンは女を欲望の対象、所有物と考えているから、ウースーンが別の男の所有物になったとき嫉妬を抱く。その結果、彼はウースーンに対する自らの欲望を抑制する。彼にとって、欲望は基本的に自己愛にむかうものである。

the youth shut up from

The lustful joy. shall forget to generate. & create an amorous image

In the shadows of his curtains and in the folds of his silent pillow.

Are not these the places of religion ? the rewards of continence ?

The self enjoyings of self-denial ? Why dost thou seek religion ?

Is it because acts are not lovely, that thou seekest solitude,

Where the horrible darkness is impressed with reflections of desire.

(VDA, 7 : 5 -11)

セオトーモンは欲望の対象たる女を退け、欲望がたんなる “the shadow of desire” (MHH, E34) になるまで抑制する。プロミオンは女を「空白」として無視するが、セオトーモンは「空白」としての女すら認めず、ひたすら鏡に映る自分のすがただけを愛する。このように自己愛にひたるものは、「生み出す」ことも忘れる。セオトーモンは生殖に結び付く男のセクシュアリティも否定す

る。彼は「自制」の結果、他者を否定するばかりか、自己も否定してしまう。プロミオンの性的暴力は男が抑圧者であることを端的に示すが、セオトーモンの「自己否定による独りの楽しみ」は男も男が築いた制度の被抑圧者でもあることを表しているのである。彼はその名が示すように自らの神の概念に苦しむもの（Theo-tormented）である。

ブレイクは *The Marriage of Heaven and Hell* (1790-93) で欲望を育むだけで実行に移さない態度を厳しく非難した。欲望の解放はブレイクのいう革命のエネルギーの爆発であるが、欲望が行動を伴わなければ、革命は起こるはずもない。実行に移さない欲望をもつものは、体制側にくみして、“pestilence” (MHH, E35) を広めるのである。そればかりではない。実行に移さない欲望とは、セオトーモンの自己愛のように、たんに他者との関係を拒否し、自分だけに悦びをとっておくことだ。これに反し、実行に移す欲望は必ず他者にむかい、他者になんらかの影響を与えなければならない。ブレイクは “Notebook” (ca. 1793) で次のようにいっている。

What is it men in women do require  
 The lineaments of Gratified Desire  
 What is it women do in men require  
 The lineaments of Gratified Desire (E474-75)

男は女に、女は男に「満足させられた欲望の輪郭」を求める。自己の欲望の解放は他者を満足させねばならない。自己と他者の欲望は相補的關係なのである。

ウースーンはセオトーモンを自己愛から解放するために、彼に女を与える。

But silken nets and traps of adamant will Oothoon spread,  
 And catch for thee girls of mild silver, or of furious gold;  
 I'll lie beside thee on a bank & view their wanton play  
 In lovely copulation bliss on bliss with Theotormon:  
 Red as the rosy morning, lustful as the first born beam,

Othoon shall view his dear delight, nor e'er with jealous cloud  
 Come in the heaven of generous love; nor selfish blightings bring.

(VDA, 7 : 23-29)

この箇所はウースーンの解放の声を疑問視する例として指摘されてきた。<sup>(12)</sup>なるほど彼女は体制側が用いる束縛の道具 (“nets & gins & traps,” VDA, 5 : 18) を仲間の女性を捕らえるのに使っている。しかしウースーンの「絹の網やきつい罫」だけに注視して、同箇所を読むべきではないだろう。彼女の真の目的は、セオトーモンの「満足させられた欲望の輪郭」を見ることである。それはまた、相補的にウースーンの「満足させられた欲望の輪郭」である。彼女はセオトーモンと娘たちの交わりをみて、「薔薇色の夜明けのように赤らみ、初日の光のような欲望」に燃えたいのだ。

ところが、セオトーモンは相補的關係を求めないので、常にフラストレーションに陥る。またプロミオンもある意味でナルシストである。彼は女をなんたるものとして扱い、他者への影響を無視している。彼の誤った欲望の解放もセオトーモンとおなじくフラストレーションを引き起こすはずだ。両者とも他者のなかに「満足させられた欲望の輪郭」を求めないので、自己のなかにもそれを見出せないのである。この意味でセオトーモンばかりかプロミオンもユリゼンの体制の犠牲者である。換言すれば、ウースーンを含めて三者三様に束縛されているのである。

三者三様の束縛はいままで述べてきたように隠喩的なだけでなく、具体的にも描かれる。ウースーンとプロミオンはセオトーモンによって、プロミオンの“caves”のなかで、背中合せに縛られている。セオトーモンの“black jealous waters”が不義の二人を取り巻き、彼は洞窟の入り口に座って密かに涙をながす (VDA, 2 : 4-7)。だが、詩の最終プレートが明らかにするように、二人を取り囲んだセオトーモンの海自体「囲われた海」である：“Theotormon sits / upon the margind ocean conversing with shadows dire” (VDA, 8 : 11-12)。セオトーモンも自分の海で束縛されている。彼の話し相手は鏡のなかの自己の投影たる「恐ろしい影」だけである。

挿絵においては、セオトーモンの自己幽閉はより明確である。不義の二人を縛った様子を描いた扉絵<sup>(13)</sup>では、セオトーモンも洞窟のなかにいて、見ることも聞くこともしない姿勢でうずくまる。プレート4の挿絵でも、彼はうずくまり、頭上を舞っているウースーンの姿を見ようとしぬ。プレート6の挿絵では、彼は自分自身を鞭で痛みつけていて、ウースーンが顔を両手で隠して泣きながら去ろうとしているのに気がつかぬ。セオトーモンを取り囲んだ海は、ウースーンを見ることも聞くこともしない彼の精神の束縛のあらわれといえよう。そしてウースーンがセオトーモンだけに「起きて」とよびかけていることは、彼の束縛が誰にもまして意味を持っていることを示すだろう。次にあきらかにするように、彼の束縛と解放こそ「男の言葉」と「女の言葉」を的確に表現しているのである。

セオトーモンが束縛状態に陥った原因は、プロミオンがウースーンを凌辱したからである。しかし、セオトーモンは強姦が実際に起こったのかどうか知らない。彼はプロミオンから聞いただけである。プロミオンの非情な言葉はセオトーモンをウースーンと同じ状態に追い込む。セオトーモンもプロミオンがウースーンを凌辱したことを表す動詞“rent”で、プロミオンに引き裂かれる：“Bromion rent her with his thunders. . . . Then storms rent Theotormons limbs” (VDA, 1 : 16, 2 : 3)。セオトーモンは涙にくれるが、その涙は奴隷の涙である。

At entrance Theotormon sits wearing the threshold hard  
 With secret tears; beneath him sound like waves on a desert shore  
 The voice of slaves beneath the sun, and children bought with money.  
 That shiver in religious caves beneath the burning fires  
 Of lust, that belch incessant from the summits of the earth  
 (VDA, 2 : 6 - 10)

奴隷所有者のようにウースーンに「刻印」を押したプロミオンは、セオトーモンにも同じ苦痛を与えている。セオトーモンもプロミオンの明らかな犠牲者な

のである。そしてセオトーモンは、プロミオンの言葉をうのみにして、ウースーン＝娼婦の意識を最後まで持ち続ける。換言すれば、セオトーモンはプロミオンの「男の言葉」に従っている。彼はユリゼンの体制の「男の言葉」に縛られた、体制の被抑圧者である。一方、ウースーン＝娼婦を否定するウースーンの「女の言葉」に対し、セオトーモンは耳を貸そうとしない。「女の言葉」は彼に「男の言葉」からの解放を約束するのに、彼はそれに気がつかない。ウースーンの嘆きの声が空しく響くだけである。

前に言及したように、ウースーンの「女の言葉」は「女の存在」と二律背反の関係であった。彼女は「女の言葉」を発するとき、「女」として存在していない。別様にいえば、「女の言葉」をいう彼女の存在は虚構である。同様のことはプロミオンにもいえるかもしれない。何故なら、現実の両性の葛藤を表しているかにみえる三角関係自体が、セオトーモンの妄想の所産と考えられるからだ。すなわち、彼は、プロミオンの言葉に従った結果不義の二人を背中合わせに縛り、正当な夫婦ではないことを示した。しかしそれによって自分自身もウースーンから離される。彼はおのれの意志によって自己とウースーンの間にもプロミオンを介入させたのである。端的にいえば、『アルビオンの娘たちの幻想』はセオトーモンの物語である。セオトーモンは「男の言葉」と「女の言葉」という束縛と解放の相反するベクトルをプロミオンとウースーンに語り合っているのである。そしてセオトーモンは「囲まれた海に座りこみ、恐ろしい影〔プロミオンとウースーン〕と話しあう」のだ。

#### IV

『アルビオンの娘たちの幻想』が詩題どうりアルビオンの娘たちの「幻想」あるいは「見たもの」ならば、三角関係は現実味を帯びる。アルビオンの娘たちは名前が示すごとくイギリスの女たちである。彼女たちは隷属状態にある自らの状況打破を、もともと自分たちの姉妹であった“the soft soul of America”（VDA, 1:3）たるウースーンの自由に羽ばたく精神に託しているのかもしれない。最終プレートの挿絵は、まさに彼女たちが天翔るウースーンを仰ぎ

見ている場面である。また逆に、扉絵が示すように、彼女たちはウースーンがプロミオンと背中合わせに縛られているのを見て、涙にくれているのかもしれない。いずれにせよ、三角関係は彼女たちにとって虚構ではない。

ところがアルビオンの娘たちの「幻想」という同詩の枠組は、“Visions”と題した詩の本文の冒頭から崩壊している。アルビオンの娘たちも「幻想」のなかに登場人物として入り込み、終始“Enslav'd”(VDA, 1:1)のまま、ウースーンの嘆きの声をこだまの様に返すだけである。彼女たちは決してプロミオンやセオトーマンの声を聞いていない。そして奇妙なことに、彼女たちが実際に大西洋を隔てて存在しているとしても、それはウースーンの声によってだけ確信できる。要するに、彼女たちは「幻想」を外側から見ているのではなく、「幻想」の内側にいるウースーンのダブル的存在である。複数のダブルが「幻想」のなかに混入することで、ウースーンの問題は普遍性を帯びる。セオトーマンがウースーンの「女の言葉」を聞き入れないかぎり、ウースーンもアルビオンの娘たちも「奴隷状態」とどまる。男が解放されなければ、女も解放されないのである。だから『アルビオンの娘たちの幻想』をセオトーマンの物語というのはあながち誇張ではない。「幻想」の前につけられた“The Argument”にはセオトーマンの名しかあきらかにされていない。彼を愛した「わたし」は誰で、「わたし」を犯したのは誰なのか、読者は「幻想」を読むまでわからない。セオトーマンの束縛と解放の意味は女の「わたし」の問題である。

ブレイクの革命願望がウースーンの「女の言葉」に託されていることは間違いないだろう。そのとき、ブレイクの眼がセオトーマンの解放だけに注がれていると読むならば、『アルビオンの娘たちの幻想』は反フェミニズムの書である。その解釈では、「女の存在」を得たら女は沈黙するのだと主張するウースーンを再び「失われた少女」のオーナーの束縛状態へともどしているに等しい。だが、ブレイクの眼がウースーンの解放まで及んでいると読めば、同書は二次的にせよフェミニズムの書である。セオトーマン解放後のウースーンは沈黙を保っていても、もはやオーナーのように「男の言葉」を前にして沈黙する女ではない。ウースーンは「男の言葉」に逆らう必要がないから沈黙するのである。

いずれにせよ、ブレイクが現実にな女の味方か否かは瑣末の問題であろう。むしろ、われわれはブレイクがウースーンの「女の言葉」と「女の存在」の亀裂を描いたことに注目せざるをえない。これは現在のフェミニストが遭遇している解決不可能な問題を暗示する。<sup>(14)</sup>すなわち、ディスコースそのものが男のものであり、女はそれを借りて話さなければならない。「男の言葉」に反論をとるには、女は男のディスコースを使わねばならないのである。この意味で、しばしばウースーンがブレイクの代弁者とみなされているのは至論である。ウースーンの「女の言葉」はブレイクの声である。彼は「男の言葉」に反抗する「女の言葉」を提示することで、革命を目指したのだ。「女の言葉」は革命を引き起こす「言葉」としてひとり歩きしているのである。

#### 注

- (1) 同書は十八世紀のフェミニスト Mary Wollstonecraft の *A Vindication of the Rights of Women* (1792) の思想を積極的に弁護した詩であると指摘されてきた。Cf. Mark Schorer, *William Blake: The Politics of Vision* (New York: Holt, 1946), p. 290; D. V. Erdman, *Blake: Prophet Against Empire: A Poet's Interpretation of the History of His Own Times*, 3rd ed. (1954; rpt., Princeton: Princeton Univ. Press, 1977), p. 243; S. Foster Damon, *A Blake Dictionary: The Idea and Symbols of William Blake* (1965; rpt., London: Thames & Hudson, 1979), p. 438 など。Henry H. Wasser は同詩を “an expression of Blake's knowledge of the love affair between Mary Wollstonecraft and Henry Fuseli” とみなした。“Notes on the *Visions of the Daughters of Albion* by William Blake,” *Modern Language Quarterly*, 9 (1948), pp. 292-97. ブレイクとウールストンクラフトの交友関係については次を参照。Mona Wilson, *The Life of William Blake* (1971; rpt., London: Granada, 1978), p. 46.
- (2) John Milton, *Paradise Lost* (New York: Norton, 1975) からの引用に拠る。
- (3) Elaine Showalter は “muted group” を構成してきた女の文化的状況とフェミニスト文学理論との類似を指摘している。“Feminist Criticism in the Wilderness,” *Critical Inquiry*, 8 (1981-82), pp. 197-200. 本論の注(12)も参照。
- (4) ものを書く女は “lustful women” とみなされ、風刺的的だった。Cf. Felicity Nussbaum, “HETEROCLITES: The Gender of Character in the Scandalous Memoirs,” in *The New 18th Century: Theory·Politics·English Literature*, ed. Felicity Nussbaum &



- Laura Brown (New York & London: Methuen, 1987), p. 158.
- (5) ブレイクの作品からの引用はすべて、*The Complete Poetry & Prose of William Blake*, ed. D. V. Erdman, rev. ed. (Berkeley: Univ. of California Press, 1982) に拠る。SE, MHH, VDA, BU, J はそれぞれ *Songs of Experience*, *The Marriage of Heaven and Hell*, *Visions of the Daughters of Albion*, *The Book of Urizen*, *Jerusalem* の略である。E の後の数字は頁数を表す。
- (6) Lawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800*, abr. ed. (London: Penguin, 1979), pp. 390-94.
- (7) 換言すれば、女性性は “the blank page” としてつねに読まれるか書かれるかというテキストである。Cf. Susan Gubar, “‘The Blank Page’ and the Issues of Female Creativity,” *Critical Inquiry*, 8 (1981-82), pp. 244-46.
- (8) Gayatri Chakravorty Spivak, “French Feminism in an International Frame,” *Yale French Studies*, 61-62 (1981), pp. 180-81.
- (9) ブレイクの大預言の書では、処女性を武器に男を縛り、支配する “Female Will” になる。*Europe* (1794) の Enitharmon は「女の意志」のはじめての例で、 “tell the human race that Woman love is Sin! . . . Forbid all Joy, & from her childhood shall the little female / Spread nets in every secret path.” (5 : 5 - 9) と言っている。
- (10) Nelson Hilton, “An Original Story,” in *Unnam'd Forms: Blake and Textuality*, ed. Nelson Hilton & Thomas A. Vogler (Berkeley: Univ. of California Press, 1986), p. 81, n. 10.
- (11) 詳しくは次を参照。George Mills Harper, *The Neoplatonism of William Blake* (Univ. of North Carolina Press, 1961), p. 242.
- (12) D. Aers, “William Blake and the Dialectics,” *ELH*, 44 (1977), pp. 505-06.
- (13) 挿絵は、*The Illuminated Blake*, anno. D. V. Erdman (New York: Anchor, 1974) を参照。扉絵のプレートの絵が最終プレートであるコピーもある。
- (14) Hélène Cixous, Luce Irigaray, Marguerite Duras などのフレンチ・フェミニストは、論理的、理論的なディスコースを男性性に帰し、女性性を “the silent” のレベルに見出している。詳しくは、Elaine Marks & Isabelle de Courtivron, ed. *New French Feminisms* (New York: Schocken, 1980) を参照。